

## &lt;資 料&gt;

## Cognitive Fusion Questionnaire 日本語版の妥当性の検討

嶋 大樹\* 柳原茉美佳\* 川井 智理\* 熊野 宏昭\*\*

## 要 約

本研究では、思考内容と現実を混同する「認知的フュージョン」という行動を測定する質問紙である、CFQ 日本語版 (28 項目版, 13 項目版) の信頼性と妥当性の検討を深めることを目的とした。大学生を対象に調査を行った結果、CFQ 日本語版は 28 項目版, 13 項目版ともに原版と同様に 2 因子構造を示した。2 つの因子はそれぞれ「認知的フュージョン」と、そこから抜け出す行動である「脱フュージョン」に相当すると考えられる。また CFQ は反すうを測定する RRQ, 心配を測定する PSWQ と強い正の相関を示し、併存的妥当性が確認された。今後はより少ない項目で認知的フュージョンを測定することができる 13 項目版の使用が推奨される。しかし 13 項目版の信頼性については、第 1 因子では  $\alpha = .89$  と十分な値が得られたが、尺度全体で  $\alpha = .77$ , 第 2 因子では  $\alpha = .59$  という値だった。そのため項目内容の改訂を行い、検討を進めていく必要がある。

**キーワード:** Cognitive Fusion Questionnaire, 認知的フュージョン, 脱フュージョン

## 問題と目的

第三世代の認知行動療法であるアクセプタンス & コミットメント・セラピー (Acceptance and Commitment Therapy: ACT) では、心理的な問題の原因として、思考内容と現実とを混同する、「認知的フュージョン」という行動の存在が指摘されている (Hayes & Pankey, 2002)。認知的フュージョンは現実の出来事から距離を取り、直接的な体験の機会や外的な環境との接触を減少させるとされている (Luoma, Hayes, & Walser, 2007 熊野・高橋・武藤監訳 2009)。

認知的フュージョンは、思考、感情、身体感覚といった私的出来事の内容や頻度を変えようとする行動である「体験の回避」や、私的出来事を自分自身と同一視してしまい、必要な行動の

生起を阻害する可能性を持つ「概念化された自己」などの行動との関連があるとされている (Bach & Moran, 2008 武藤・吉岡・石川・熊野監訳 2009)。ACT で提唱されるこれらの行動間の関連を明らかにし、介入の効果や機序を明確にしていくためには、認知的フュージョンを個別に検討する必要がある。そのために、認知的フュージョンを簡便に測定することができる質問紙が有用であると考えられた (Dempster, 2009)。

このような背景を踏まえて、Dempster (2009) によって、Cognitive Fusion Questionnaire (CFQ) 15 項目版が作成された。CFQ は 2 因子構造であり、項目内容を元に第 1 因子は「認知的フュージョン」、第 2 因子は認知的フュージョンから抜け出す行動である、「脱フュージョン」に相当するとされている。第 2 因子の項目を逆転して合計得点を算出し、得点が高いほど認知的フュージョンの程度が強いとされる。その後、Dempster (2009) の研究では作成過程にあった

\*早稲田大学大学院人間科学研究科

\*\*早稲田大学人間科学学術院

28 項目版を使用し、サンプルを変えて CFQ の妥当性の確認が行われた。その結果、13 項目が適当であるとされたため、再度 13 項目版の検討が行われた (Chambell, 2010)。CFQ13 項目版は 2 因子構造であり、不安と抑うつ、体験の回避と正の相関、マインドフルネスと負の相関が示され、十分な妥当性を有すると結論づけられた。現在は、CFQ28 項目版と 13 項目版が日本語化されている (森本・熊野・宇留鷲・佐々木・金谷・野村, 2011)。日本語版 CFQ の Cronbach の  $\alpha$  係数は 28 項目版では  $\alpha = .87$  と原版と同程度に高く、13 項目版では  $\alpha = .77$  という結果が示された。

Dempster (2009) の報告では CFQ は 2 因子構造であるとされているが、13 項目版の作成段階では第 2 因子の項目を逆転項目とし、1 因子構造として扱うとする結果も示されている (Chambell, 2010)。日本語版では原版 (Dempster, 2009) と同様に、28 項目版、13 項目版どちらも 2 因子構造を示しているが、第 2 因子の各項目についての詳細な検討は行われていない。

認知的フュージョンは現実の出来事と思考とを混同する行動であるため、言葉や思考の確信度との関連が強いと想定されてきた。そのため、自動思考の頻度と確信度を測定する Automatic Thoughts Questionnaire-Revised (ATQ-R: 見玉・片柳・嶋田・坂野, 1994) を用いて妥当性の検討が行われた。その結果、CFQ は、否定的自動思考の頻度との相関 ( $r = .62$ ) が、確信度 ( $r = .37$ ) との相関よりも強いという結果が示された (森本他, 2011)。

しかし、Masuda, Hayes, Sackett, & Twohig (2004) や、Masuda, Hayes, Twohig, Drossel, & Washio (2009) の報告によると、認知的フュージョンを弱める行動である脱フュージョンによって、言葉の確信度と不快度が減少するという結果が示され、認知的フュージョンと言葉の確信度との関連が示唆された。森本他 (2011)

の研究で妥当性検討に使用された ATQ-R の原型である ATQ は、Hollon & Kendall (1980) によって自動思考の頻度の測定を目的として開発されており、Zettle & Hayes (1986) によって確信度も測定することが出来るように改良された。しかし、自動思考の確信度の項目について妥当性を検討したという記述は見られない。ATQ では認知的フュージョンと関わる思考の確信度をうまく測定できていない可能性があるため、並行検査としては適切でなかった可能性がある。

また、言葉による思考内容と現実を混同する行動を、言葉を用いた質問紙で測定できるのか (つまり、その回答自体も現実を反映していない可能性がある) という問題もある。思考プロセスに関する思考であるメタ認知を質問紙で測定することは一般的に行われていることから、認知的フュージョンをメタ的に評価した程度を測定することは可能と考えられるが、その点についても、妥当性の検討などを通じて支持的な結果が得られることを確認する必要がある。そのため本研究では、臨床場面や研究で CFQ を活用するため、認知的フュージョンに関係すると想定される行動を測定する尺度との関連を調べることで妥当性の検討を深めるとともに、信頼性も再度確認することを目的とする。

## 仮説

CFQ 日本語版には、認知的フュージョンだけでなく、脱フュージョンに相当すると考えられる項目も含まれているため、先行研究と同じく 2 因子構造になると予想される。信頼性は、先行研究と同程度の内的整合性を示すと考えられる。妥当性については、言葉の内容と現実とを混同することで、現在ではなく過去と未来にばかり注意が向かう行動の生起頻度が高まるため (Hayes & Smith, 2005 武藤・原井・吉岡・岡嶋訳 2010)、過去のことを繰り返し考え抑うつを悪化させるとされる反すうや、未来のことを考え続

けて不安を悪化させるとされる心配といった行動を測定する尺度と、中程度から高い正の相関を示すと予想される。

## 方 法

### 測定

1) Cognitive Fusion Questionnaire 日本語版 (森本他, 2011)：本研究では 28 項目版を用いて調査を行い、13 項目版は該当する項目を抜き出して検討を行う。2) Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ: 高野・丹野, 2008)：反すうと省察を測定する、24 項目の尺度である。本研究では反すうの下位尺度 12 項目のみを使用する。得点が高いほど反すう傾向の高いことを示す。3) Penn State Worry Questionnaire 日本語版 (PSWQ: 本岡・松見・林, 2009)：心配を測定する、16 項目の尺度である。得点が高いほど心配傾向の高いことを示す。**倫理的配慮**

本研究は「早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て行われた（承認番号：2012-184）。

## 結 果

2012 年 7 月から 10 月に質問紙調査を実施し、首都圏の私立大学に通う学生 591 名から回答を得た。得られた回答から不備のあったものを除いた 461 名（男性 225 名、女性 236 名、平均年

齢  $19.92 \pm 1.40$  歳）を因子分析の対象とし、312 名（男性 144 名、女性 168 名、平均年齢  $20.11 \pm 1.36$  歳）を相関分析の対象とした。得られた回答の平均値、標準偏差、有効回答数を Table 1 に示す。

### 探索的因子分析

CFQ の因子構造を明らかにし、第 2 因子の項目を検討するために、CFQ28 項目版について、主因子法に基づく探索的因子分析を行った。スクリープロットの形状と先行研究 (Chambell, 2010; Dempster, 2009; 森本他, 2011) の結果から 2 因子構造であると判断した。再度主因子法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、1 回の反復で結果は収束した。その結果を Table 2 に示す。第 1 因子に 19 項目、第 2 因子に 9 項目が負荷する構造が示された。因子間には、弱い負の相関が示された。CFQ13 項目版についても、28 項目版と同様の手順で因子分析を行った。こちらは Table 3 に示す結果が得られた。第 1 因子に 9 項目、第 2 因子に 4 項目が負荷する構造が示された。因子間には、弱い負の相関が示された。

### 信頼性の検討

CFQ28 項目版の 2 つの因子と尺度全体について、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した (Table 1)。

### 妥当性の検討

CFQ と RRQ, PSWQ との相関係数を求めた (Table 4)。CFQ28 項目版、CFQ13 項目版は RRQ, PSWQ と、有意な強い正の相関が示された。

Table 1 CFQ28 項目版, CFQ13 項目版, RRQ, PSWQ の平均値, 標準偏差, 有効回答数

	平均値	標準偏差	有効回答数
CFQ28 項目版	113.41	20.14	461
CFQ13 項目版	52.09	10.01	
RRQ	41.84	7.82	312
PSWQ	53.80	11.98	

Table 2 CFQ28 項目版の因子分析結果

項 目	因子負荷量	
	I	II
I ( $\alpha = .94$ )		
14 動揺するような考えに執着しない方が自分の役に立つと分かっている、そうすることにとっても苦勞する	.81	.11
13 つらくなるような考えにとっても集中してしまう	.78	.08
27 自分の考えに対し、あまりに強く反応してしまいがちである	.76	-.01
22 自分自身の考えと苦闘する	.76	-.11
15 考えていることのせいで、実際にしていることから気がそれてしまう	.74	.07
16 考えていることに囚われすぎて、自分が一番したいことをすることができない	.71	.05
12 自分自身に対して否定的な考えを持つときに、気持ち動揺する	.71	.05
25 いったん何か動揺することを考えだすと、他のことに集中するのは難しい	.71	.21
4 未来や過去のこと頭がいつぱいになっていることに気づく	.70	-.02
1 自分の思考が、苦悩や心の痛みの原因になっている	.70	-.03
10 自分の考えにかなり巻き込まれがちだ	.67	-.06
7 特定のことを考えてしまうことで、自分に動揺する	.66	-.02
2 自分が今考えているようには考えるべきでないと、自分に言い聞かせる	.63	-.08
8 より良い人生を送ることができるようになる前に、自分の考えを変える必要があると感じる	.60	.03
17 自分に役に立たない位にまで、状況の分析をしすぎてしまう	.60	-.10
28 考えていることに囚われすぎて、今実際に何をしていたのかも忘れてしまう	.60	.09
11 自分の考えには、悪いものや不適切なものがあると思う	.58	-.04
5 自分の考えが良いか悪いかといった判断を下す	.55	-.16
26 頭に浮かぶ考えはコントロールする必要がある	.51	-.20
II ( $\alpha = .81$ )		
21 動揺するようなことを考えたときでも、自分の人生にとって大切なことを実行できる	.09	.70
18 自分の考えに囚われることなく、距離をとってそれを観察することができる	.07	.69
20 自分自身に対して否定的な考えを持ちながら、それでもなお自分は満足のいく人間であると理解していることは可能である	.08	.64
24 自分の考えに、必ずしも反応することなしに気づいていることができる	-.15	.63
9 違う観点から自分の考えを見ることは容易である	.13	.59
23 たとえそんなことはできないという考えを抱いたとしても、私は困難なことを実行できる	-.06	.57
6 動揺するようなことを考えたときでも、その考えが文字通りの事実ではないかもしれないと理解できる	-.11	.49
19 同じ事に対して、一貫性のない考えを持っていても大丈夫である	-.03	.45
3 自分を苦しめる考えを持っているときでも、結局その考え自体は、それほど重要なものではなくなるだろうとわかっている	-.22	.34
$\alpha = .88$	因子間相関	
	-.17	

Note. 第2因子の項目は逆転処理を行っている

N = 461

Table 3 CFQ13 項目版の因子分析結果

項 目	因子負荷量	
	I	II
<b>I (<math>\alpha = .89</math>)</b>		
1 自分の思考が、苦悩や心の痛みの原因になっている	<b>.70</b>	-.00
14 動揺するような考えに執着しない方が自分の役に立つと分かっている、そうすることにとっても苦勞する	<b>.80</b>	.14
22 自分自身の考えと苦闘する	<b>.80</b>	-.04
27 自分の考えに対し、あまりに強く反応してしまいがちである	<b>.77</b>	.01
16 考えていることに囚われすぎて、自分が一番したいことをすることができない	<b>.73</b>	.10
10 自分の考えにかなり巻き込まれがちだ	<b>.66</b>	-.04
7 特定のことを考えてしまうことで、自分に動揺する	<b>.64</b>	-.05
17 自分に役に立たない位にまで、状況の分析をしすぎてしまう	<b>.62</b>	-.04
26 頭に浮かぶ考えはコントロールする必要がある	<b>.51</b>	-.17
<b>II (<math>\alpha = .59</math>)</b>		
20 自分自身に対して否定的な考えを持ちながら、それでもなお自分は満足のいく人間であると理解していることは可能である	.08	<b>.62</b>
9 違う観点から自分の考えを見ることは容易である	.10	<b>.54</b>
6 動揺するようなことを考えたときでも、その考えが文字通りの事実ではないかもしれないと理解できる	-.12	<b>.51</b>
3 自分を苦しめる考えを持っているときでも、結局その考え自体は、それほど重要なものではなくなるだろうとわかっている	-.19	<b>.39</b>
$\alpha = .77$	因子間相関	
		-.19
Note. 第2因子の項目は逆転処理を行っている		
	$N = 461$	

Table 4 CFQ28 の総得点, CFQ13 の総得点と RRQ, PSWQ の Pearson 積率相関係数

	RRQ	PSWQ
CFQ28	.71***	.72***
CFQ13	.69***	.61***
*** $p < .001$	$N = 312$	

Table 5 CFQ28 の第1因子の総得点, RRQ, PSWQ と CFQ 第2因子の項目それぞれの Pearson 積率相関係数

	3	6	9	18	19	20	21	23	24
第1因子の総得点	-.28**	-.19**	.03	-.05	-.11*	-.03	-.03	-.16**	-.25**
RRQ	-.16**	-.07	.14*	.16**	.08	.07	.11	.00	-.01
PSWQ	-.06	.07	.22**	.22**	.17**	.18**	.27**	.19**	.08

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$ 
 $N = 461$

## 第2因子の各項目の妥当性の検討

第1因子の総得点、RRQ、PSWQと逆転した第2因子の各項目の得点の相関を算出した(Table 5)。第1因子の総得点と第3項目、第24項目では有意な弱い負の相関、第6項目、第19項目、第23項目では有意なごく弱い負の相関が示された。RRQとは、第3項目で有意なごく弱い負の相関、第9項目、第18項目で有意なごく弱い正の相関が示された。PSWQとは、第9項目、第18項目、第21項目で有意な弱い正の相関、第19項目、第20項目、第23項目で有意なごく弱い正の相関が示された。

## 考 察

### 探索的因子分析、第2因子の各項目の検討の結果

主因子法、プロマックス回転による因子分析の結果、CFQ28項目版では2因子が抽出され、13項目版でも同じく2因子が抽出された。これにより、先行研究と同様に、CFQ日本語版は2因子構造を示すという仮説は支持された。

CFQの2因子は、それぞれ認知的フュージョンと脱フュージョンに相当するとされている(Dempster, 2009)。第1因子は、「自分の思考が、苦悩や心の痛みの原因になっている」や、「自分の考えにかなり巻き込まれがちだ」といった項目で構成されており、思考内容と現実とを混同してしまう行動である認知的フュージョンを表現しているといえる。

第2因子は、第20項目「自分自身に対して否定的な考えを持ちながら、それでもなお自分は満足のいく人間であると理解していることは可能である」や、第23項目「たとえそんなことはできないという考えを抱いたとしても、私は困難なことを実行できる」という項目で構成されている。逆転した第2因子の項目と、第1因子の総得点との相関係数を算出したところ、第9,18,20,21項目では有意な相関が示されず、第

19,23項目ではそれぞれ有意ではあったがごく弱い負の相関が示されたのみであった。反すうを測定するRRQとは、第9,18項目で有意なごく弱い正の相関が示され、心配を測定するPSWQとは、第9,18,19,20,21,23項目で有意な弱いまたはごく弱い正の相関が示された。そのため第3,6,24項目を除く、第2因子のこれらの項目では、脱フュージョンを測定できていると考えられる。

上記の項目のうち第9項目「違う観点から自分の考えを見ることは容易である」や、第18項目「自分の考えに囚われることなく、距離をとってそれを観察することができる」は、自身の思考から距離を取る行動である脱フュージョンを適切に表現しているといえる。脱フュージョンが出来ない場合、反すうをやめることが容易ではなくなるため、2つの項目では反すうとごく弱いながらも有意な正の相関が示されたと考えられる。

第9,18項目と、第20項目「自分自身に対して否定的な考えを持ちながら、それでもなお自分は満足のいく人間であると理解していることは可能である」、第21項目「動揺するようなことを考えたときでも、自分の人生にとって大切なことを実行できる」では、第1因子との有意な相関が示されなかった。認知的フュージョンには無い、「自身の価値に向かって行動する」、「考えている自己と観察する自己の弁別」という、脱フュージョン特有の機能が表現されているためである可能性が考えられる。

第19項目「同じ事に対して、一貫性のない考え方を持っていて大丈夫である」と第23項目「たとえそんなことはできないという考えを抱いたとしても、私は困難なことを実行できる」では、上記4項目と同じく心配と有意なごく弱い正の相関を示したが、第1因子との間に有意なごく弱い負の相関が認められた。しかし因子分析の結果では、この2項目の第1因子に対する負荷量はそれぞれ-.03、-.06と大変小さいため、



事実上第 1 因子との関連はなく、上記の 4 項目と同じように考えて良いと判断した。

残る 3 項目のうち、第 6 項目「動揺するようなことを考えたときでも、その考えが文字通りの事実ではないかもしれないと理解できる」、第 24 項目「自分の考えに、必ずしも反応することなしに気づいていることができる」、第 3 項目「自分を苦しめる考えを持っているときでも、結局その考え自体は、それほど重要なものではないだろうとわかっている」を比較すると、第 3 項目のみが反すうとごく弱いながらも有意な負の相関を示した。また 3 項目とも第 1 因子の総得点とは有意な負の相関を示したが、その値は第 3 項目が一番大きく、さらに因子分析の結果での第 1 因子への負荷量も第 3 項目で最大、第 2 因子への負荷量は第 3 項目が最小となっていた。以上より、少なくとも第 3 項目は、脱フュージョンを測定する項目としては不適切である可能性がある。

#### 信頼性の検討

信頼性検討の結果、28 項目版での  $\alpha$  係数の値は、第 1 因子  $\alpha = .94$ 、第 2 因子  $\alpha = .81$ 、全体で  $\alpha = .88$  となり、森本他 (2011) の研究 (第 1 因子  $\alpha = .93$ 、第 2 因子  $\alpha = .79$ 、全体  $\alpha = .87$ ) と同程度に高い内的整合性が示された。この結果より、28 項目版では高い内的整合性が示されたといえる。13 項目版では、第 1 因子は  $\alpha = .89$  と高かったが、第 2 因子については  $\alpha = .59$ 、全体では  $\alpha = .77$  と、十分な値は得られなかった。しかし、こちらも先行研究 (第 1 因子  $\alpha = .89$ 、第 2 因子  $\alpha = .61$ 、全体  $\alpha = .77$ ) と同程度の内的整合性が示されている。この結果より、CFQ 日本語版は十分な信頼性を示すという仮説は部分的に支持された。

#### 妥当性の検討

CFQ 日本語版は 28 項目版、13 項目版とも総得点と RRQ、PSWQ との間に有意な高い相関が示されたため、仮説は支持された。認知的フュージョンは、思考の内容と現実とを混同する

行動であるため、未来や過去についての同じ内容を繰り返し考える心配や反すうと関連が強いと考えられた。この結果より、高い併存的妥当性が確認された。

#### 今後の展望

本研究では、CFQ28 項目版と 13 項目版の検討を行い、その信頼性と妥当性が部分的に示された。認知的フュージョンとの関連が想定されていた心配や反すうとの間にも有意な高い相関が示されたため、認知的フュージョンという行動を少なくとも部分的には測定できていたと考えられる。今回調査に用いた CFQ28 項目版は開発初期の段階の尺度である。今後は最新版であり、より簡便に認知的フュージョンの測定が可能な 13 項目版の使用が適当であると考えられる。今回の研究では、28 項目版から該当する 13 項目を抽出して調査を行っており、本来の 13 項目版での調査はされていない。そのため、今後は 13 項目版を用いた調査を広く行い、信頼性と妥当性のさらなる検討や、項目内容の吟味、測定している行動の明確化を進めていく必要がある。

なお、英語版での「Even when I am having distressing thoughts, I know that they may become less important eventually.」という項目が、日本語版での第 3 項目、「自分を苦しめる考えを持っているときでも、結局その考え自体は、それほど重要なものではないだろうとわかっている」という訳になっている。日本語版はバックトランスレーションの過程を経て作成されたが、英語版と日本語版での質問のニュアンスに違いがあり、訳文の方が「それほど重要なものではない」という思考内容に対して強く思い込んでいるような印象を与えた可能性がある。表現を、「それほど重要なものではないだろうと気づいている」と変えて、より適切な項目に改善できるかどうかを検討する必要がある。

英語版の 13 項目版では尺度全体で  $\alpha = .86$  と高い内的整合性が示されているが、日本語版で

は  $\alpha = .77$  となっている。これには、第3項目の不適切さが関わっている可能性があるので、改訂した上で再調査を行い、内的整合性についても確認をする必要がある。

上述の通り、CFQは心配や反すうといった認知的フュージョンと関連の深い変数と有意な高い正の相関が示された。今後は、脱フュージョンと関連があると考えられる変数との比較を行い、2つの因子についてさらに検討を進めていくことで、CFQが測定している行動をより明確にし、改善していくことができると考えられる。

CFQは2因子構造であることが示されたが、脱フュージョンを測定しているとされる第2因子の項目では、認知的フュージョンとは関連のない、脱フュージョン特有の機能を測定できている可能性も示された。そのため、第2因子を逆転項目として合計得点を算出するか否かについては、今後、それぞれの因子の項目が表現している機能を明確にしていくことで、検討していく必要があると考えられる。

## 引用文献

- Bach, P. A., & Moran, D. J. (2008). *Act in practice: Case conceptualization in acceptance & commitment therapy*. Oakland: New Harbinger Publications.
- (バツハ, P. A., モラン, D. J. 武藤 崇・吉岡昌子・石川健介・熊野宏昭 (監訳) (2009). ACT (アクセプタンス&コミットメント・セラピー) を実践する——機能的なケース・フォーミュレーションにもとづく臨床行動分析のアプローチ 星和書店)
- Chambell, L. (2010). *Test-retest reliability and further validity of the cognitive fusion questionnaire*. Unpublished doctoral dissertation. The University of Edinburgh, Old College, South Bridge, Edinburgh.
- Dempster, M. A. (2009). *The development and initial validation of a scale to measure cognitive fusion*. Unpublished doctoral dissertation. The University of Edinburgh, Old College, South Bridge, Edinburgh.
- Hayes, S.C., & Pankey, J. (2002). Experiential avoidance, cognitive fusion, and an ACT approach to anorexia nervosa. *Cognitive and Behavioral Practice*, 9, 243-247.
- Hayes, S.C., & Smith, S. (2005). *Get out of your mind & into your life: The new acceptance and commitment therapy*. Oakland: New Harbinger Publications.
- (ヘイズ, S.C., スミス, S. 武藤 崇・原井宏明・吉岡昌子・岡嶋美代 (訳) (2010). ACT (アクセプタンス&コミットメント・セラピー) をはじめる——セルフヘルプのためのワークブック 星和書店)
- Hollon, S.D., & Kendall, P.C. (1980). Cognitive self-statements in depression: Development of an automatic thoughts questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, 4, 383-295.
- 児玉昌久・片柳弘司・嶋田洋徳・坂野雄二 (1994). 大学生におけるストレスコーピングと自動思考、状態不安、および抑うつ症状との関連 ヒューマンサイエンス, 7, 14-24.
- (Kodama, M., Katayanagi, K., Shimada, H., & Sakano, Y. (1994). The relationship among stress coping with automatic thoughts, state anxiety, and depressive symptoms in college students. *Journal of human sciences*, 7, 14-24.)
- Luoma, J.B., Hayes, S.C., & Walser, R.D. (2007). *Learning ACT: An acceptance and commitment therapy skills-training manual for therapists*. Oakland: New



- Harbinger Publications.  
(ルオマ, J.B., ヘイズ, S.C., ウォルサー, R.D. 熊野宏昭・高橋 史・武藤 崇 (監訳) (2009). ACT (アクセプタンス&コミットメント・セラピー) をまなぶ——セラピストのための機能的な臨床スキル・トレーニングマニュアル 星和書店)
- Masuda, A., Hayes, S.C., Sackett, C.F., & Twohig, M.P. (2004). Cognitive defusion and self-relevant negative thoughts: examining the impact of a ninety year old technique. *Behavior Research and Therapy*, **42**, 477-485.
- Masuda, A., Hayes, S.C., Twohig, M.P., Drossel, C., & Washio, Y. (2009). A parametric study of cognitive defusion and the believability and discomfort of negative self-relevant thoughts. *Behavior Modification*, **33**, 250-262.
- 森本克明・熊野宏昭・宇留鷺美紀・佐々木理恵・金谷順弘・野村 忍 (2011). 認知的フュージョン質問紙 (Cognitive Fusion Questionnaire-28; CFQ-28) の日本語版の作成及び信頼性・妥当性の検討 日本行動療法学会第37回大会発表論文集, 464-465.  
(Morimoto, K., Kumano, H., Uruwashi, M., Sasaki, R., Kanaya, T., & Nomura, S.)
- 本岡寛子・松見淳子・林 敬子 (2009). 「心配」の自己評定式質問紙——Penn State Worry Questionnaire (PSWQ) 日本語版の信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, **42**, 247-255.  
(Motooka, H., Matsumi, J., & Hayashi, K. (2009). The reliability and validity of a japanese version of the penn state worry questionnaire (PSWQ) : a self-report inventory of "worry". *The Japanese Journal of Counseling Science*, **42**, 247-255.)
- 高野慶輔・丹野義彦 (2008). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み パーソナリティ研究, **16**, 259-261.  
(Takano, K., & Tanno, Y. (2008). Development of japanese-version rumination-reflection questionnaire. *The Japanese Journal of Personality*, **16**, 259-261.)
- Zettle, R.D., & Hayes, S.C. (1986). Dysfunctional control by client verbal behavior: The context of reason-giving. *The Analysis of Verbal Behavior*, **4**, 30-38.

## Validation of the Japanese Version of the Cognitive Fusion Questionnaire

Taiki SHIMA\*, Mamika YANAGIHARA\*, Tomonori KAWAI\*,  
and Hiroaki KUMANO\*\*

\*Graduate School of Human Sciences, Waseda University

\*\*Faculty of Human Sciences, Waseda University

### Abstract

This study investigated the validation of the Japanese version of the Cognitive Fusion Questionnaire (CFQ). The results of the investigation show that the CFQ reflects a two-factor structure that is the same as the original version. It is thought that the two structures correspond to “cognitive fusion” and “cognitive defusion”. Cognitive fusion is a behavior in which one confuses a thought with a fact. Cognitive defusion is a behavior in which one gets out of “cognitive fusion.” A significant relationship was found between the total scores of the CFQ and the RRQ, which measures rumination (28 items:  $r = .71$ , 13 items:  $r = .72$ ), and between those of the CFQ and PSWQ, which measures worry (28 items:  $r = .69$ , 13 items:  $r = .61$ ). The CFQ has a concurrent validity because it showed correlation, as mentioned above. Thus, the usefulness of the 13- as well as 28-item version was shown. However, concerning the reliability of the 13-item version, although a sufficient value was shown in the first factor ( $\alpha = .89$ ), the second factor ( $\alpha = .59$ ) showed an insufficient value. Therefore, some of the items should be revised, and the CFQ should be investigated further.

**Key words:** Cognitive Fusion Questionnaire, cognitive fusion, cognitive defusion